

要旨

易學史の研究において明代の易學は等閑視される傾向にあった。それは、永樂帝の勅命による『周易大全』の編纂により、程頤の『易傳』と朱熹の『周易本義』を基にする程朱易學が正統的易解釋として認められ、明代における程朱易學の影響が強かったためである。また、黄宗義をはじめとする、清代易學の程朱易學に對する批判的立場も、そうした明代易學の風潮に對する反發として理解されてきた。しかし、こうした認識は、易學史における明代と清代の斷絶との誤解を招く恐れがある。なぜなら、明代易學史においても義理を重視する程朱易學を批判し、象數を以て易を理解しようとしたものが存在し、彼らの易學が清代易學における程朱易學への批判に影響を及ぼしたと見受けられるからである。その代表的な人物が來知徳である。

來知徳（一五二五～一六〇四）は、字は矣鮮、號は瞿唐、四川梁山（今重慶市梁平縣）の人で、蜀の易學を代表するものとして程頤と並稱されるほどの明末の著名な易學者である。來知徳が（四川）萬縣の山中に籠もり易に没頭すること二十九年にして完成したのが『周易集注』である。その易説は繫辭上傳の「錯綜其數」を基として易の象を論じたもので、それがすなわち來知徳の易學を代表する「錯綜説」である。文王の序卦（六十四卦の配列）に基づく來知徳の錯綜説は、近世中國のみならず朝鮮や日本にも大きな影響を及ぼしたものである。そのような近世易學史における來知徳の影響を考慮すれば、來氏易學の研究は近世易學史の解明のためにも一考に値すると考えられる。

本研究は、かかる來知徳の易學を取り上げ、その易學體系の特徴及び後代の易學への影響の考察を通じて、易學史における來氏易學の意義を明らかにするものである。

第一章の「來知徳の錯綜説」においては、來氏易學を代表する錯綜説を考察した。錯は乾☰☰坤☷☷のように陰陽反對の兩卦の關係をいい、綜は屯☳☶蒙☶☳のように上下反對の兩卦の關係をいう。従來の研究は兩卦の關係を意味する錯綜説が、漢易の旁通卦（錯）や反對卦（綜）の類似技法であり、六十四卦の配列に關する「非覆即變」説の敷衍であると評價する。しかし、かかる評價は程朱易學が主流を占めた明代易學の風潮を考慮に入れていないものである。

來知徳の錯綜説はその當時の程朱易學の義理易や先天易を批判するもので、それは『周易大全』に對する來氏の批判から窺える。來氏は『周易大全』における象の輕視や、兩卦が對になる現行本の卦序を考慮しない分卷體制を批判し、卦序に現れる錯綜の象を強調す

る。

來知徳は『周易』の成立過程における文王の役割に着目して、その「六十四卦の配列」に秘められている錯綜の象が「卦爻辭」創作の原理を表していると考え、繫辭傳の「錯綜其數」の新解釋を通じて錯綜説を形成する。その形成においては漢易の「旁通」説・孔穎達の「非覆即變」説・「上下經各十八卦」説・朱熹の「錯綜」説の影響が見られる。しかし、來知徳はその錯綜説に基づく新しい易解釋を試みながら、その錯綜説に「陰陽の對待と流行」という易の原理や、「交易と變易」という易の兩義を結び付けて、伏羲の先天易と文王の後天易の統一を圖る。それを通じて、來知徳はその當時流行した先天易の先天後天の説を乗り越えようとしたのである。そのような來氏の錯綜説には朱熹の易學の影響が強く見られる。

來知徳はかかる錯綜説をさらに十翼の解釋にまで適用して、『周易』全體の解釋において錯綜説を貫く。來知徳は、孔子の十翼は陰陽の對待と流行という錯綜の原理を敷衍説明したものであり、その中で錯綜を最も明確に表しているのが序卦傳と雜卦傳であると考え。特に序卦傳を聖人の書と認めない韓康伯以來の批判を、來知徳は錯綜の原理を知らないものと強く批判したのであるが、それは來氏が序卦傳の論理に拘らずその卦序の象に注目したためである。

以上のように、序卦傳と雜卦傳の新評價や、先天後天の原理を統合しようとした來知徳の錯綜説は、易學史における來知徳の功績として評價できると考えられる。

第二章の「來知徳の卦變説批判と卦生成論」においては、來知徳の卦變説批判に焦點を合わせて、來氏の卦變説批判の意圖やその批判の根據である錯綜説と爻變説の関係及び卦生成論を明らかにした。

錯綜説に基づく來知徳の卦變説批判を氏の易學體系の中で理解しようとする際に次のような疑問點が生ずる。一つは、來氏の易學體系における「卦變説批判」と「爻變説」の関係の問題である。來氏は易解釋の主要原理として錯綜・中爻（互體）と共に「變」を強調するが、朱伯崑氏は來氏の「變」を爻變説と定義して卦變説と区分する。しかし、爻變説が結局爻變による卦の變化を意圖するという點などを考慮すれば、卦變説と爻變説は既存の定義のように明確に區別可能なものではない。そうであれば、來知徳の卦變説批判は氏の易學體系において爻變説の主張と相容れないものとなる。かかる兩説の関係を解明するためには、來氏の批判する卦變説と氏の主張する爻變説がより具體的に説明される必要がある。

第二點は、來氏の卦變説批判が氏の易學體系において新たな卦生成論を必要とするという問題である。何故なら、従來の卦變説は程朱易學において卦の生成變化を説明する卦生成論として理解されて

きたためである。程頤は説卦傳の乾坤生六子説に基づいて八卦の生成を説明し、その程氏の説を批判した朱熹は先天後天の説に基づいて自某卦來之説を後天易の卦生成論と理解した。しかし、來知徳において卦變説批判の根據となる錯綜説は、文王の『周易』創作の原理を説明する理論で、文王以前に既に存在した卦の生成を説明するものではない。また、來氏は先天・後天の區分を否定するために朱熹の卦生成論を受け入れないのである。それならば、來氏はどのような卦生成論を提示しているのであろうか。この二つの疑問點を解明した先行研究はまだない。

本章の考察によれば、來知徳の卦變説批判は虞翻以來の自某卦來之説による象傳解釋を錯綜説の綜卦に代えたもので、文王の『周易』創作原理である錯綜を『周易』全體の解釋に一貫して適用しようとした意圖に由来したものである。來氏の易解釋原理の一つである變は小成卦における一爻の陰陽變化を意味する爻變説で、爻辭の解釋において卦象を導くためのものである。かかる爻變説は來氏の易學體系において卦變説批判の根據となる錯綜説と相互補完的な関係にあると言えよう。

また、來知徳は程朱易學において卦生成論と認識されてきた卦變説を受け入れないために、それらに代わる卦生成論を提示しなければならなかった。しかし、來氏は朱熹の先天後天の區別を否定し先天易の加一倍法を取らず、繫辭傳に基づいて小成卦の八卦と八純卦の生成を説明し、八純卦の順次的爻變を通じて六十四卦の生成を説明した。來知徳のかかる爻變説と卦生成論からは京房易學の影響が窺える。

第三章の「易學史における來氏易學の影響」においては、王夫之の乾坤竝建論や、胡渭と江永の卦變説及び丁若鏞の易理四法を取り上げ、彼らの易説と來知徳批判に見られる來氏易學の影響を考察した。

王夫之の乾坤竝建論は『周易』における陰陽二氣の不可分・無先後の關係を強調するものであり、その乾坤竝建論の基盤となるのが文王の卦序に基づき對になる兩卦の緊密な關係を強調した錯綜説である。王夫之の錯綜説には來知徳の影響が見受けられるが、王夫之は錯綜の原理を未だ誰も明らかにしたことはないものとし、自身のどの著作においても來知徳の名を擧げてはいない。序卦傳に対する相反する評價のように、兩氏の錯綜説はその展開においては相異なる様相を見せる。しかし、兩氏の錯綜説における類似點を考慮すれば、來氏の錯綜説が王氏の易學形成に一定の影響を與えたと思ふのが穩當であると考えられる。

胡渭・江永兩氏の卦變説は來知徳の綜卦と同じく文王の序卦を根

據とした反對卦を主張するものである。それにも関わらず、胡江兩氏は來氏の錯綜説に對して批判的な立場を取る。胡渭は來氏の錯綜説における先天易からの影響を指摘して、錯綜という概念が繫辭傳の原義とは異なる斷章取義であると批判し、江永はその錯綜説の綜卦に当たる反對卦が來氏の創案でないことを指摘し、李光地が『周易折中』において來氏の説を排除したのも、象傳の卦變問題を綜卦によって自身がはじめて解決したという來氏の傲慢な態度に起因すると考えた。しかし、文王の序卦に注目して易解釋における反對卦の意味を強調した彼らの卦變説は、錯綜説に基づく來氏の卦變説批判が有効であったことを證明するものであると考えられる。

朝鮮後期の易學を代表する丁若鏞は易解釋の主要原理として推移・爻變・互體・物象という易理四法を主張し、また「來氏易注駁」（『易學緒言』）においては來氏の錯綜説を強く批判した。しかし、來丁兩氏の易學は類似する點が多々見られる。丁若鏞の易理四法を來知徳の易經字義と比較すれば、丁氏の物象・互體・爻變はそれぞれ來氏の象・中爻・變に類似するものであり、來丁兩氏の易説における大きな相異は來氏の錯綜説と丁氏の推移説にあることが分かる。丁氏の推移説は、來氏が錯綜説に基づいて否定した卦變を主張するものである。丁若鏞の來氏批判は主に來氏の錯綜説に對するもので、その批判は丁氏自身の推移説を正當化しその説の理論的優秀性を強調するためのものである。推移説をもって卦變を説いた丁氏にとって、そうした卦變説を批判した來知徳とその批判の根據となった錯綜説は、批判して克服しなければならない對象であったと考えられる。また、來丁兩氏の易學における類似點に注目すれば、丁氏の錯綜説批判は來氏易學との差別性を強調するためのものであったと考えられる。

第四章の「易學史における文王序卦の研究と來知徳の「上下經篇義」」においては、易學史における文王序卦の研究について基礎的考察を試み、また來氏の「上下經篇義」を分析して、來知徳の錯綜説の淵源が易學史における文王序卦の研究にあるという點を明らかにした。

本章でいう「文王序卦の研究」とは、易學史における文王の序卦（卦を序す）、すなわち現行本『周易』の六十四卦配列と上下經區分の原理を究明しようとした研究を指すものである。孔子が文王の序卦の意圖を述べたものとされる序卦傳がその始まりであると言えよう。序卦傳に由來する「上經天道、下經人道」説やその發展と見られる『易乾鑿度』の「上經象陽、下經象陰」説・程頤の「陽上陰下」説・吳澄の卦統説（分節説）は、上下經の主要卦の意味に注目してそこから六十四卦の配列や上下經の區分に秘められているとさ

れる文王序卦の原理を説明しようとしたものである。それに對して、「上下經十八卦」説は専ら上下經における卦數の一致或いは均等を求めて、それを根據に文王の上下經區分が單に書物の分量によるものではなく、ある原理による意圖的なものであることを證明しようとしたものである。「二二相耦、非覆即變」説はかかる「上下經十八卦」説の重要な根據となるのである。

來知徳の「上下經篇義」は六十四卦配列と上下經區分の原理について解説したものである。「上下經篇義」の前半においては上下經の卦配列に關する原理を説明する。まず、上下經が乾坤と咸恆から始まることについて、來氏は序卦傳の天道と人道の二分法によって説明する。また、來氏は乾坤と咸恆の上下二卦の入り交じった變化を綜といい、泰否と損益を乾坤と咸恆の綜卦と見なして上下經の主要卦とする。その次に上下經の終わりである坎離と既濟未濟について説明する。來氏は水火の坎離を乾坤のような陰陽對待の錯を表したものとして、上經の始終卦に現れる錯の原理を天道・體に當てはめる。中男の坎と中女の離からなる既濟未濟は咸恆と同じく男女の交わり、すなわち陰陽流行の綜を表したものとして、下經の始終卦に現れる綜の原理を人道・用に當てはめる。このように「上下經篇義」の前半は文王の序卦に關する従來の研究、すなわち「上經天道、下經人道」説や分節説に新しく自身の錯綜説を組み合わせて文王序卦の原理を説明したものである。

「上下經篇義」の後半においては、上下經區分による卦數多寡の問題を、卦の陰陽爻數の比較を通じて説明する。上經三十卦の陽爻は八十六、陰爻は九十四で、陰が陽より八つ多く、下經三十四卦の陽爻は一百六、陰爻は九十八で、陽が陰より八つ多い。また、屯蒙のように綜の關係にある兩卦を一つにして数えれば、上下經は同じく十八卦になる。このように、「上下經篇義」の後半は「上下經十八卦」説に基づいて文王の上下經區分における卦爻數の多寡問題を説明したものである。

このように來知徳の「上下經篇義」は易學史における文王序卦の研究の流れを汲むものであり、來氏の錯綜説もそうした先儒の序卦研究を基にして形成されたものと考えられる。

以上、本論文の考察を通じて、易學史における來知徳の易學の意義を再考するならば以下になるであろう。即ち、『周易』成立における文王の役割に注目して文王の序卦と卦爻辭創作の原理を究明しようとした來知徳の易學は、それまで序卦傳や文王八卦の方位を説明する理論に過ぎなかった文王易にその當時主流であった先天の伏羲易と對等な意味を付與して、「文王易」の易學史的價値を新しく發掘したもので、「文王易」の集大成と評價できるのである。